

Olav Hammer and Kocku von Stuckrad ed.
Polemical Encounters: Esoteric Discourse and Its Others
Brill, Leiden, 2007. pp. xxii + 325, \$ 170.00.

野口 孝之

本書は、西洋世界での異なった宗教と宗教、教義と教義、主義と主義が遭遇したときに生じる衝突・論争に焦点を当てた論文集である。12人の研究者が、それぞれの専門の時代の思想家や事象について議論している。ルネサンス期の思想家を対象にする論文から、20世紀のダウジングを考察の対象にする論文に至るまで、広範囲の事象がとり上げられているが、全章はある中心的な概念に沿ってまとめられている。その中心的な概念は、「論戦 (polemics)」と「エソテリシズム (esotericism)」である。どちらの概念も本書では特別な意味を込めて用いられているので、簡潔に説明する必要があるだろう。

「論戦」は、一般に、単純なディベートを越える修辭的戦略を定義するのに使われる言葉である。その目的は、究極的には敵対する立場の殲滅 (annihilation) である。論戦の対義語は「擁護・弁明 (apologetics)」であり、自らの支持する立場を正当化することである。「論戦」と「擁護」における一般的用法に対し、実際には論戦と擁護は相互に結びつく。なぜなら自らの正当性を主張することは、対立する立場を否定することにも繋がるからである。本書において、論戦は、自らの立場の正当性・正統性を主張し、他者や他の思想から自らを境界づけるために使われる弁論による戦略として定義される。本書の議論は、西洋の宗教史が多元性に対する抵抗によって構築されてきたという歴史理解を前提としている。特にキリスト教は、マニ教、ユダヤ教、イスラム教、さらには内的な異端が共存する多元的状况の中での論戦を通して、徐々に主流の教義を確立させてきたことがイントロダクションにおいて示される。その遭遇時の反応が様々なテキストの中に現われているのだ。

他方、「エソテリシズム」は、一般に、秘儀的な神秘思想を意味し、具体的には「カバラ」や「ヘルメス主義」、さらに占星術や錬金術などの「オカルト諸学」といわれるような思想を指す概念として用いられる。このエソテリシズムという概念はしばしば、主流の教義とは離れた異端や奇異なオカルティズム、または対抗文化の意味を込めて用いられる。しかし本書の議論の中で、エソテリシズムとして名指される思想は必ずしも周縁的意義しか持たないものではなく、主流と言われる教義にも深く関係してきたことが提示されるであろう。さらにエソテリシズムの思想が宗教の内的・外的「論戦」の中で重要な役割を果たしてきたことも明らかにされるだろう。

「論戦」と「エソテリシズム」という中心的概念を踏まえた上で、これからそれぞれの論文を

簡単にはあるが見ていくことにする。紙幅の関係上、いくつかの論文は割愛させていただく。以下が本書に掲載されている論文と著者の目次である。

イントロダクション 西洋エソテリシズムと論戦 Olav Hammer and Kocku von Stuckrad

第1部 論戦からみたカバラ

- ・キリスト教的カバラと反 - ユダヤ教の論戦：コンテキストの中のピコ Kocku von Stuckrad
- ・キリスト教の正統とユダヤ教カバラ：永遠の知の探究におけるロシア神秘主義 Konstantin Burmistrov
- ・アドルノのカバラ：いくつかの予備的考察 Steven M. Wasserstrom
- ・「権威ある守護者」：カバラの実践者に対するユダヤ教神秘主義の学術的研究者の論戦 Boaz Huss

第2部 異端、アイデンティティ、そして諸教派間の論戦

- ・像をめぐる問題：反 - 像の論戦と西洋エソテリシズム Wouter J. Hanegraaff
- ・異端と正統の間：16世紀後半のドイツにおける錬金術と敬虔 Hanns-Peter Neumann
- ・神智学と正統キリスト教の間：ヨハン・ザロモ・ゼムラーのヘルメス主義的宗教 Peter Hanns Reill
- ・メーソンのネクロマンサー：ヨハン・ゲオルク・シュレプファーの生涯におけるアイデンティティの推移 Renko Geffarth

第3部 近代文化におけるアイデンティティの正当化

- ・ルネ・ゲノンと伝統主義者の論戦 Brannon Ingram
- ・議論される占い師：ダウザーと懐疑論者の間における言葉の闘い Olav Hammer
- ・ニューエイジにおける古代の知の探求：ニューエイジとネオ・グノーシス主義によるトマスの福音書への見解 Dylan Burns
- ・多様性の統一、内部からの分裂：現代のウィッチクラフトにおける正当化の力学 Titus Hjelm

第1部「論戦からみたカバラ」では西洋キリスト教世界のユダヤ教神秘主義との接触に関連することが主題となっている。特に、西洋の宗教の中で、カバラがどのような役割を果たし、どのような影響を与えてきたかに焦点が当てられている。

(1) Kocku von Stuckrad は、15世紀後半のキリスト教的カバラ (Christian kabbalah) の潮流の出現に注目し、キリスト教の知識人とユダヤ教の知識人が出会う状況での相互交流や論戦を背景にして、カバラがどのような役割を担っていたかについて考察している。特に、キリスト教世界へのカバラの流入に多くの影響を与えたとして有名なピコ・デラ・ミランダの背景を分析している。著者は、ピコを単純に反ユダヤ主義者として扱うのではなく、むしろピコがユダヤ教のカバリストたちの膨大な学識を認め、彼らの援助を利用した事実を指摘した上で、その事実が如何に宗教間の論戦に影響を与えてきたかを論じる。つまり、従来のキリスト教対ユダヤ教とい

う単純な対立の中でのカバラという図式ではなく、キリスト教徒とユダヤ教徒の宗教間における濃密で複雑な相互交流・情報交換の中におけるカバラの役割を指摘することを試みている。

著者はその描写のために、Steven M. Wasserstrom (3 番目の論文:「アドルノのカバラ」の著者)の用いた「諸教派間のサークル (interconfessional circles)」という言葉を利用し、「諸宗教間のサークル (interreligious circles)」という概念をつくり出し、諸宗教間のネットワークの重要性を指摘する。そのネットワークを結びつけるものが、自らのアイデンティティ確立のための宗教的・哲学的情熱 (passion) であり、その情熱に呼応するものがカバラであると主張される。著者は、このルネサンス期のカバラの役割に対する分析を一つのケースとするだけではなく、カバラを含めたエソテリズムが諸宗教間、あるいは諸教派間の論戦や交流の繋ぎ目となることを主張したいようである。このエソテリズムの新たに想定された機能は今まで注目されることがなかったため、大変興味深い。また著者の議論は、キリスト教が一元的に西洋世界の思想を支配してきたという紋切り型の理解を覆し、むしろ宗教の多元性 (pluralism) の下での内的・外的交流が西洋世界の思想の主流を構築してきたという言説をうち立てる可能性を内包していると言える。しかし、著者によれば、「諸宗教間のサークル」は、昨今必要性が唱えられるような「宗教の対話 (dialogue of religious)」とは違う。「諸宗教間のサークル」は、あくまで情報交換の場であり、その情報は自らの教義またはアイデンティティを強化するために、また他者との境界づけ (つまり論戦) のために使われてきた。その意図は、必ずしも宗教の相互理解ではない。

(2) Konstantin Burmistrov は、18・19世紀のロシアにおける多元的な宗教状況の中でユダヤ教神秘主義、カバラの概念がどのような役割を担ってきたかについて論じている。特に、ロシアのフリーメーソンに共有されたカバラへの関心がどのような背景で生み出され、自分たちの思想の中に取り入れられたのかに注目している。著者によれば、18世紀のロシアは社会的、文化的、そして宗教的危機の時代であった。ロシア正教会も厳しい状況に置かれ、神学的思想は衰退の一途を辿り、宗教上の諸問題は沈黙と隠蔽の下に逃げ込むことになった。その背景の中で、フリーメーソンに属する様々な知識人が、ロシアにおける思想の充実として、また直接的にロシア正教会を拒絶するのではなく改革するためとして、ユダヤ教神秘主義の伝統を利用していった。著者はその時代の分析として、当時の様々な著者のテキストを解析し、カバラの Ein-Sof (無限) の概念やアダム・カドモン概念の受容を考察する。そしてフリーメーソンによるカバラの受容が、ロシアにおける宗教的思想に大きな影響を与え、エソテリックな概念とロシア的伝統を結びつけることにより、神学的充実が生まれ、キリスト教の固定化したドグマを克服していったと結論する。元々、シンクレティズムはフリーメーソンの特徴ではあるが、このケースで特徴的なのは、あくまでロシアの正統的思想を保持しようとしたことである。ユダヤ教神秘主義は、あくまで精神的危機を克服するために便宜的に使われたのである。

このような論点は興味深いが、しかし、フリーメーソンの改革的思想がどのような「場」においてロシアの正統的思想に影響をもたらしたかが明瞭ではない。この「場」とは、フリーメーソンの思想とロシアの正統的思想、そしてロシア正教会との社会的接点である。特に、ロシア正教会による受容 (または反発) が教会に属する神父の間で為されたのか、それとも一般人レベルでも受容されたのかという問題が未だに明快ではない。さらに言えば、ロシアの正統的思想とはいかなる思想なのかははっきりとはしていない。著者は、明らかにロシア正教会の教義とロシア的

伝統を区別して使っているが、その違いも曖昧である。ロシアの正統的思想とユダヤ教神秘主義の交流と受容における問題は、まだまだ議論の余地があるだろう。

(3) Boaz Huss は、現代における、学問的カバラ研究と実践的なカバラの関係を考察する。そこで注目されているのは、ユダヤ教神秘主義に学問的研究を導入したゲルショム・ショーレムである。まず著者は、ユダヤ教神秘主義の歴史を概観する。その概観によれば、ユダヤ教神秘主義の受容が増加したのは、ユダヤ教とは違うヨーロッパのネオ・ロマンティシズム、さらにはブラヴァツキーの神智学協会やニューエイジ運動においてであった。これらのユダヤ教外でのカバラの興隆に影響を受け、ユダヤ教内でもカバラやハシディズムが再評価される。このような背景の中でショーレムはユダヤ教神秘主義研究を志すようになったという。

次に著者は、ショーレムの学問的カバラ研究を分析していく。ショーレムはネオ・ロマンティシズムの文脈におけるカバラの利用を否定すると共に、カバラを利用する側の文献学的・歴史学的無知を批判する。ショーレムにとってカバラは、ユダヤ人の歴史的民族性にとって初めて意義を持つ思想であり、西洋近代世界における意義は何も持たないからである。さらにショーレムは、マルティン・ブーバーなどによるユダヤ教神秘主義の実存主義的・表現主義的解釈を基本的には否定し、当時の実践的カバリストをも批判する。つまり、ショーレムにとってのカバラはシオニズム・ヘブライズムのために機能する思想であり、カバラを真に理解するために必要なのは、近代における哲学的模索や実践ではなく、ユダヤ人の歴史に関する文献学的・歴史学的知識であった。

ショーレムの分析を踏まえた上で、著者は現代の学界におけるユダヤ教神秘主義研究の批判へと移る。ユダヤ人の歴史的民族性のためにだけ機能する思想としてカバラを見なすショーレムの立場、言わば「権威ある守護者（この論文の題名：Authorized Guardians）」という立場をある程度無意識に踏襲することによって、現代の学問的カバラ研究者が同時代のカバラ実践者を無分別に批判している、と著者は指摘する。ショーレムがカバラをいかに解釈しようとも、そのカバラは、分析的に見れば、「構築されたカバラ」であり、新たなエソテリシズムを構成している。次章の Wouter J. Hanegraaff が鋭く洞察しているように、そのカバラはショーレムにより権威化された「記憶の歴史 (mnemohistory)」であり、客観的な「歴史記述 (historiography)」ではない。大事なことは、エソテリシズムの中に「記憶の歴史」が存在することを自覚することである。その「記憶の歴史」の自覚を現在のユダヤ教神秘主義研究者はほとんど見落としていると、著者は主張しているのである。このことは、ユダヤ教神秘主義研究者に限らず、エソテリシズムの研究者にとって忘れてはならないことである。

第2部「異端、アイデンティティ、そして諸教派間の論戦」では、信仰やアイデンティティをめぐる論戦が異なった主義の形成に対して役に立ってきた多様な道程が考察される。

(4) Wouter J. Hanegraaff は、西洋世界において、宗教思想の中での「像」(images)をめぐる問題が重要であることを主張し、その「像」に対する態度の多元性の中で西洋思想は複雑化してきたことを強調する。この複雑化した西洋思想を解析するためにエソテリシズムという概念を利用していく。そのエソテリシズムは、「像」への態度の論戦の中で発展した「主要な論戦の物語 (grand polemical narrative)」であり、そこには論戦の中で構築された「記憶の歴史」が含まれ

ているという。

まず著者は、シェーンベルグのオペラ『モーセとアロン』の中から、神の「像」を絶対的に拒否したモーセと「像」を許容したアロンを例にして、唯神論（Monotheism、通常は一神教と訳すべきであるが、宇宙神論と対比させるために敢えて唯神論と訳す）と宇宙神論（Cosmotheism）の対比の中での「像」の問題を取り上げる。宇宙神論とは、著者が唯神論の反対の概念として多神教（Polytheism）の代わりに使用する概念である。宇宙神論は世界に内在する神や世界に隠された真理を示す宗教思想であり、その神は何千の「像」の中に自身を隠したり顕したりする。その神はコスモスや人間、社会に対立するものではなく、世界に「住む」神である。その思想はヘルメス主義の中に顕著に見られる。それに対して唯神論の神は、根本的に人間の世界と隔てられた他者としての神であり、イメージすることのできない領域の神である。著者はこの2つの世界観を取り上げるが、その世界観の対立はあくまで「主要な論戦の物語」であり、2つの単純な区別は不可能で、複雑な相互作用の中にあると指摘する。その相互作用の例がネオ・プラトニズムである。ネオ・プラトニズムは、解釈によりどちらの世界観にも転ぶことができる。著者は、こうして単純な図式化を批判し、これらの世界観に関する問題で重要なのが、「像」の扱いであることを強調する。

さらに著者は、「像」のもつ力（power）についても論じる。一つの例として、人がカトリックの大聖堂に入った時の感情を挙げている。人が大聖堂の中に安置されているマリア像を見る時、マリアがそこに現前しているような感覚を受けるだろう。もしかしたら生命を持っているように感じるかもしれない。もちろん、像の生命化というアニミズム的思考は異端とされるだろう。しかし、人は像に対して何かの「力」を感じる。著者は、「像」の生命化や「像」における力の内在を示す例として、タリスマンやアミュレットを挙げている。このような例を示すことにより、偶像崇拜の禁止という思想も「像」の力に向き合う態度の違いとして議論されるべきことを主張する。それぞれの思想は、「像」の力あるいは魅力にどのように向き合うべきか、受容するべきか、拒絶するべきかという論戦の中で成長してきたものであって、最初からステレオタイプの区別されるべきではない。その意味では、異端も正統も同じ問題から出発しているとも言える。

著者はこれらの議論により、いかに宗教上の世界観や知識が「像」に対する態度の論戦の中で生み出され発展してきたかを主張する。それが「主要な論戦の物語」であり、それを端的に示すのがエソテリシズムである。そして著者はエソテリシズムという概念を幅広く解釈し、人間が外界と直面した際に生じる世界観や知識、あるいは思考の方法が、宗教間の論戦の中で重要な要素を担ってきたことを論証するのである。しかし、著者の「像」に関する議論はあまりに抽象的であり、結局、思想分析の混乱を招きかねない。また、この論文で扱われる「像」という言葉は、あまりに広範囲に用いられている。「像」には必ず人間の思考や想像が関わるのには違いないが、その想像の過程と結果、さらに目の前で動く物体との区別は依然としてあるだろう。とは言え、エソテリシズムが単なる正統教義に対する異端や対抗文化として想定されてしまうことを拒否し、エソテリシズムの内部には正統教義とも切り離すことができない本質的な問題が隠されていることを示すには、十分に有益な議論であるだろう。この議論の成果により、歴史的分析の中では、もはや正統と異端、主流文化と対抗文化という単純な図式化はできなくなるであろう。

第3部「近代文化におけるアイデンティティの正当化」では、近代化のコンテキストの中での、エソテリックな教義の形成における論戦の役割に焦点を当てている。

(5) Brannon Ingram は、近代化を霊的墮落とみなして古代の知を尊重した伝統主義者ルネ・ゲノンに注目する。当時のヨーロッパの東洋学者が東洋を劣った側、西洋を優秀な側とステレオタイプ的に分類した中、ゲノンはその分類に対して東洋の価値を肯定的に見た。ゲノンにとって、東洋が静寂や伝統を意味する一方、西洋は変化と不安定を意味した。西洋が変化（肯定的には進歩）せずにはいられないのは、潜在的に東洋に劣等感を持つからであり、それは不安定を示している。世界は原初が最も良い状態であり、時間が進むにつれて墮落するというのがゲノンの世界観であった。ゲノンの東洋への尊敬は、「ここ」ではない彼方への憧れという欲求から生じたオリエンタリズムとある程度合致する、と著者は分析する。さらに、ゲノンの東洋的な原初の知への尊敬は、多くのエソテリズムの潮流と合致することも指摘する。とはいえ、ゲノンの言う「東洋」は直接的知識ではなく、西洋の学者の紹介から得た知識であった。ゲノンは、あくまで西洋の近代化を厳格に批判するために東洋をその模範としたと言える。

著者の議論で最も興味深い箇所は、近代の宗教研究に対するゲノンの論戦である。著者は、ゲノンのライフストーリーやテキストの分析によって、一方でゲノンが西洋のアカデミックな研究に潜んでいるドグマ的教義に反対していたことを明らかにし、他方でゲノンの思想はまさしくアカデミックな構造における宗教比較に依っていたことを指摘する。ゲノンがアカデミーの教義を批判した一方で、ゲノンの行なう宗教比較の図式は近代西洋のアカデミーのターミノロジーから来ていた。つまり、近代的学問に対するアンビヴァレンスの上にゲノンの思想は成り立っていたのである。

ゲノンは様々な関心の中で特徴的に近代の人間であったが、「近代者 (modernist)」ではなかった。この矛盾しているようで実是的を射ている著者の分析は、アイデンティティの正当化のための論戦における複雑性を証明している。

以上、評者が注目した論文に限って概観してきたが、全ての論文で貫かれているのは、やはり Wouter J. Hanegraaff の「主要な論戦の物語」というフレーズに沿った考察である。Antoine Faivre や Frances Yates が想定する従来のエソテリズムとは、集団内・個人内での個々の推論や想像の結果として導き出される思想群であった。従来のエソテリズムの用語は、特権的個人・集団による内的模索に重きが置かれていたのである。しかしこの論文集では、他の思想と隔てられがちであったエソテリズムを論戦の中に呼び込み、その論戦の中での機能的意義を明らかにした。そして、エソテリズムという思想群が単純なフレームワークで区別できるものではなく、密接に相互に結びつき合うものとして論証された。

また、本書の中ではエソテリズムという概念が従来より非常に広い意味で使われているが、エソテリズムと名指しされる思想群も発生の背景には時代の制度や文化、または思想家の興味関心や知識の限界、人との交流が潜んでいることから、エソテリズムという用語に対する Hanegraaff の使用法の変化は当然のことだと、評者は評価する。

しかし、問題点が残るとすれば、歴史的コンテキストへの個々の思想家の影響が具体的にどのように浸透していったのかがまだ不明瞭なことである。本書に載っているほとんどの論文が個人

の思想家を扱っていることにより、その思想家の分析は十分に行なわれているが、周りの背景としての社会の分析が不十分のように思える。さらに、その背景としての社会とは、知識人に限定されてしまうのか、それとも一般大衆にも及ぶのだろうか。確かに、社会的背景を近代化や合理主義、科学思想として捉えることは容易なことであろう。だが、エソテリシズムの思想を細かく分析しているにもかかわらず、社会の背景を安易な言葉で片付けてしまうのは、批判されるべきであり、さらなる研究の余地があるだろう。

論戦という視点からのエソテリシズムの研究はまだ始まったばかりであり、これからさらなる研究成果が期待できるであろう。本書の中で Kocku von Stuckrad の想定する「諸宗教間のサークル」や Hanegraaff の「主要な論戦の物語」や「記憶の歴史」という予備概念は、エソテリシズム研究のためには大いに有益であり、忘れてはならないだろう。